

真帆先生の

TEACHER
MAHO'S
OAZUKE-
LESSON

おあずけ レッスン

✧ 結婚までHはダメッ ✧

小説 あらおし悠

挿絵 四条定史

立ち読み版



序 章

先生に一目惚れ!!

006

第一章

夜の学園で先生と……

017

第二章

先生は押し掛け女房!!

060

第三章

誘惑の臨海合宿

103

第四章

学園祭とお尻の誘惑

150

第五章

聖夜の結婚式

197

終 章

甘くて甘くない新婚生活

244

登場人物紹介

Characters



みなづき まほ

水無月 真帆

おっとりした感じの真面目で熱心な新任教師。

信仰に熱心で、処女性を重んじている。



しんどう さや

真堂 紗夜

ツリ目に黒髪とクールな印象を持

つ、秀一のクラスの委員長少女。



まなべ しゅういち

真鍋 秀一

特に信心深いわけでもない普通の学生。

バイト三昧の日々を送る。

「ん? ……アレって……何?」

当然のように聞き返すと、彼女は急に怒り出したような顔になって大声を上げた。

「ですからあつ! セツ……じゃなくて、まぐわ……でもなくて、交び……は違うううつ! ええつと、ええつと……そう! 結婚まで、エッチな行為は一切禁止ですつ!」

「えええええええつ!」

戸惑いと驚きと不満が一遍に襲う。夫婦になるのなら、当然エッチは解禁のはず。それなのになぜ、どうして。天国から地獄へとはまさにこのことだろうか。いや、この場合、地獄から天国に這い上がったのに、また別の地獄へと突き落とされた気分だ。あうあうと言葉にならない抗議に、真帆は冷静を装いながら言い放った。

「当然です。卒業までは、わたしとあなたは教師と生徒なんですよ? それがエ……エッチなことをするなんて、モラルに反します。だから、婚前交渉は厳禁ですつ!」

「そ、そんなあ……」

がつくりと畳に両手をついて項垂れる。もちろん、彼女の言うことが百パーセント正しいのだが、乱高下する気持ちの落差の大きさに、情緒が不安定になっていた。

「……絶対にダメ?」

「ダメです」

「……何が何でも?」

見捨てられた子犬のように何度も懇願するが、真帆はキッパリと拒絶する。信心という

より、生来の生真面目さがそうさせているようだ。とはいえ、それはやりたい盛りの少年には酷な仕打ち。

「……そんな……。人生で、初めての恋人なのに。……受験勉強一色の生活に、潤いができたと思ったのに。……こ、これで、先生と仲良くできると思ったのに……」

「ええっ!? ま、真鍋君、そんなに落ち込まなくても、結婚までの我慢ですから、ね？」もちろん、同情を引こうなどと考えていたわけではない。だが、心の内が次々と、勝手に口から漏れてしまう。この落胆ぶりは、さすがに想定外だったようだ。悪いのは完全に秀一なのに、申し訳なさそうな顔で言い含める。だが、なまじ不相応な希望を与えられた分だけ、絶望は深かった。

「……そんなに……。わたしと、エッチ、したいですか？」

真帆が、真剣な声で尋ねてくる。さすがにワガママが過ぎただろうかと、胸の奥がチクチク痛んだ。それでも、秀一は項垂れていた顔を上げ、素直に頷く。今度こそ嫌われるかもしれないと思ったが、その恐怖より、彼女を求める欲情の方が上回っていた。情けなくもいい、みつともないと思われても、彼女の身体が忘れられない。

「……仕方ないですね……」

真帆が溜め息を吐く。だがそれは、秀一の要求を受け入れてくれたわけではなかった。

「今日だけ、ですよ？ あ、でも挿にゅ……いえ、本番……ああん、えっと、だから……昨夜みたいなのは絶対にダメですからねっ！」

そんなに何度も言い直してまで淫語を避けなくてもとは思うが、彼女にとつては恥ずかしいことなのだろう。ともかく、両手で大きな×マークを作つてまで、思いきり拒否。

「じゃあ、何が分かつたつて言うんですか？」

思わず唇を尖らせてしまう。これでは本当に駄々っ子だ。すると真帆は眼を逸らし、赤面しながら人差し指を囁んだ。

「あの……ごめんなさい！ 実は、わたし……そちらの方はあまり詳しくなくて……その……保健体育の教科書程度にしか……」

顔を覆いながらの告白に、秀一はあんぐりと口を開けた。信心深い彼女は、今までエッチ関係の事柄に触れないように生活してきたに違いない。大人なのに、性的な知識で年下の少年に劣ることを相当に恥じている。

「あの……じゃ、じゃあ……そうだな……手で触るだけっていうのは……」

つけ込むこともできただろう。だがそんなことはしたくない。でもエッチなことはしたい。葛藤の末、秀一は手淫という結果を導き出す。すると、真帆の顔色も変わった。

「手で……。それだけで、いいんですか？」

本番よりは簡単な行為だと思つたのだろうか。恥ずかしそうに長い睫毛を震わせ、チラリとこちらを見た瞳が濡れている。秀一はゴクリと生唾を飲み込んだ。いつになるか分からない結婚までの完全エッチ禁止か、それとも、この場限りの手での愛撫か。考えるまでもない。なにしろ秀一は、後味の悪い初体験以外、自分の右手しか知らないのだ。

「……お……お願い、します」

一気に緊張が高まった。乾いてしわがれた声が、喉から絞り出される。それに――秀一は感じ取っていた。これが、彼女にとつてギリギリの妥協点だということが。

「ほ、本当に手だけですよ？ それ以外には何もしませんからっ！」

「う……うん……」

本当は、押し倒したい欲望が渦巻いている。だが、ここで再び彼女の信頼を失うようなことをしたら、今度こそ二人とも立ち直れないような気がした。

狭い室内に、奇妙な緊張感が漂う。昨夜は我を忘れて勢いで事に及んでしまったが、今回は合意の上。しかも彼女の方からの申し出だ。何も遠慮する必要はないはずなのに、互いに正座したまま動けない。

（せっかく先生が触ってくれるって言うてるのに……!）

高まった焦りが、そして待ちきれずに硬く張り詰めた肉棒が、秀一を突き動かした。弾かれるように真帆の手を取ると、グイッと引っ張って自分の股間に押し当てる。

「きやあッ!!」

掌が、ズボンの膨らみを包み込む。逃げ腰になる真帆の肩を抱き寄せ、強引に勃起を握らせる。女性に対して、こんな行動に出る自分に驚いた。まるで、あの月夜が秀一の中にあつた牡の本能を呼び覚ましたかのようだ。

「や……やめ……真鍋、く……」

「先生……直接、お願い……」

真帆の言葉を遮り、耳に囁きかける。怯えたように震えていた彼女の身体がピタッと硬直した。掌も動かない。こうしているだけでも気持ちいいが、やはり直に触って欲しい。秀一はさらに身体を密着させ、甘えるように催促した。

「先生、言ったよね？ 僕のを触ってくれるって。……それとも、嘘？」

「嘘は……言いません。神に誓って……」

ぼつてりとした唇が、熱い吐息を漏らす。その神を裏切らせるようなことを要求して、自分は何て卑怯な奴だと思った。だが、真帆がためらいながらもファスナーを開けると、愛撫への期待に心が躍る。侵入してくる指に、勃起が吸い寄せられる。

「んあっ……」

ついに、ぼつそりとした指先が絡みついた。甘美な痺れが腰を蕩かす。秀一は小さく呻くと、脱力したように床に寝そべった。全てを彼女に任せようかと思っていたのに、堪えきれずに掴むのを手伝う。

「こ……これが、男の人の……!? こんなに……大きい……」

頭上から、驚嘆する真帆の声が降ってきた。だが、驚いたのは彼女ばかりではない。その持ち主である秀一も、見たことのない膨張率に眼を見張った。

キノコの笠のように、大きくエラの張ったカリ首。中央部がぶつくりと膨れた胴回り。火傷しそうな熱を孕み、ひんやりとした外気が気持ちいい。鈴口から漏れ出す先触れ粘液

で、先端部は汗を掻いたようにテラテラと怪しく輝いた。憧れの女教師の掌の中で、まるで別の生き物のようにビクビクつと大きく痙攣する。

「……これ、見るの初めて?」

真帆は興奮状態の男性器に見入ったまま、コクコクと頷いた。瞳には、恐怖にも似た感情が浮かんでいる。だが、細い喉が上下した。ゴクツと生唾を飲み込んでいる。

(先生……興奮してる!? 僕のを、あんなに熱い眼で見て……!)

昨夜まで処女だったとはいえ、大人の女性。初めて見る勃起に取り乱してはいるが、同時に興味深げに凝視している。下半身は、スカートの中は、昨夜のように濡れているのだろうか。清純そうな彼女の中にも生々しい欲情が存在するのだと思うと、秀一の下半身はますます熱く昂^{たかぶ}つた。

「……どうすればいいか分かる?」

「ばっ……馬鹿にしないでください。わたしだって、一応教師なんですから、お……男の人の生理くらいは、知っています! 知っています……けど……」

実際には、どう刺激すればいいのか、分かっているというのだ。じつと握ったまま、泣き出しそうな眼で助けを求めている。虐めたくなるような頼りなさに、秀一の中の意地悪な部分が、むくむくと首をもたげて目を覚ます。

「それじゃ、僕の言う通りに動かして……。上下に……。そう……。最初はゆっくり……」

真帆は神妙な顔で頷き、唇を結んでペニスを見据えた。真面目に、秀一の指示通りに、

絡めた指を肉棒に這わせる。

——しゅこ、しゅこ……しゅこ、しゅこ……。

皮膚が擦れる乾いた音が、微かに耳をくすぐった。しかし、まだ愛撫と呼ぶには拙く、快感にも程遠い。握ってくれるだけでも嬉しいが、もっと分かりやすい刺激が欲しい。

「手首のスナップを利かせて……もっと強くしても大丈夫だから……」

いくらそうアドバイスしても、大きな変化は見られない。だが、彼女が強く扱こうとしないのは、不慣れなためでも不器用なせいでもなかった。

「ここって、男の人には大事なところなんですよ？ 旦那様になるひとのものだし……赤ちゃんの素を作るのだから、大事に扱わないといけないと……」

「あ……赤ちゃんっ!!」

胸をズキンと撃ち抜かれた。そこまで自分のことを想ってくれていたなんて。胸が詰まって、いっぱいになって、彼女が堪らなく愛おしい。髪を撫でながら抱き寄せ、キスを求めた。唇を突き出すと彼女も応じて、啄み合うような甘い口づけを交わす。

（ああ……好きだ……。僕、この人が大好きだ!）

キスの快感が、下半身にも響いてきた。ただ充血してただけの勃起が、快感の脈動を孕んでくる。淡い疼きが、肉竿の根元から胴体、そして先端へと広がっていく。

「大丈夫。もっと強くしてくれた方が、気持ちいいから……」

秀一は自分の右手も下半身に伸ばすと、真帆の手に重ね、いきなり激しく扱き出した。

「ン……!? んむあつ! ま、真鍋君つ、そんなにしたら、こ、壊れちゃいますよ!」

驚いて離そうとする手を逃さずに、男の感じる気持ちよさを、純真な女性の掌に教え込む。左手は彼女の肩を抱き、触れ合うだけのキスに舌を参加させた。

「あむうン!? ま、まにやベクン……ン、んチュ! ……ふあむ……」

ざらつとした舌の表面が擦れると、真帆の瞳が熱く蕩けた。眼鏡のレンズ越しに見詰め合い、唾液で濡れた二枚の肉片をグチュグチュと絡め合わせる。

「ふあん……ン、ちゆる、あふうん……ちゆるッ!」

「う……くがッ! おふッ、ンンンむう……ッ!」

キスに溺れていくに従って、真帆の愛撫も激しさを増した。秀一のガイドなしでも力強く握り締め、リズムカルに勃起肉棒を扱き立てる。先触れ液が彼女の指まで濡らし、さつきまで乾いた摩擦音しかなかったのが、淫らで湿った粘着音を奏でている。

——ジュツクッ、ジュル! ジュツクッ、ジュル! ジュツクッ、ジュルッ!

「おおおおあつ! せ、せんせえええええつ!」

時折、濡れた指が敏感なカリ首を掠めるのが堪らない。やるせない快感の波動が爪先や頭頂部にまで伝播して、耐えきれなくなってきた秀一は、小さく背中を震わせた。

「真鍋君、これでいいの? こ……これ……気持ちいいですか……!」

「いいです、いいです先生ッ! も、もっと強く……は、激しく、つああッ!」

真帆の動きは変化に乏しいが、それでも焦らされた分、何倍も気持ちいい。何より、女

教師である真帆が扱いてくれていると思うだけで、二人だけの秘密を重ねる悦びに、イケナイことをしている背徳の快感に、激しい甘電流が全身を貫く。大きく開いた脚がガクガク震える。もつと彼女に弄^{いじ}って欲しい。この気持ちよさを何度でも味わいたい。秀一は唇や舌を吸いながら、聞きわけのない駄々をこねた。

「せ、先生……これつきりなんてイヤだ……！ 僕……我慢できないよッ！」

「ダ、ダメです真鍋君……。わたしたち、こんなこと……んむあんっ、しちゃ、いけないの……。本当は、キスだって……キスだって……んッ、んンッ！」

ペニスを扱くスピードを上げながら顔を捻じり、自分から舌を挿し込んだ。秀一も覆い被さってくる女体を、もがくように掻き抱く。性的な遊戯に未熟な者同士、初めて味わう快感から逃れられなくなっていた。

「で、でも……こんなに、うっ、はッ……き、気持ちいい、のに……ッ！」

「け、結婚するまでだから……それまで待つて……ああッ！ また大きく……!？」

扱く掌の気持ちよさで、ペニスが一段と膨れ上がった。絶頂が近い。しばらくお預けなら、もつと愛撫を長引かせたいのに、快感は引き返せない境地へと足を踏み入れていた。

「ああああッ！ イク……もうイキそうです、先生ッ！」

菌を食い縛って、迫る絶頂感に耐える。どうすればもつと気持ちよくなれるのか、肉欲に染まった頭の片隅で必死に考える。

「もう出るッ……先生見て！ 出るとこ見て！」



「そ……それは分かるんだけど……」

真帆には強氣に出られるのに、紗夜の威圧感には相変わらず萎縮してしまう。だがスツと隣に座った彼女の、汗混じりの柑橘系の髪の毛の匂いに、別の意味で緊張を強いられた。

「そ、そういえば、真堂さんは、テスト満点だったよね。う、海には行かないの？」

「興味ないわ。それより、何が分からないのか聞かせなさい。教えてあげるから」

「え？ ……真堂さんが？ 僕に？」

意外な申し出に聞き返すと、あからさまに不機嫌な顔をされた。どんな風の吹き回しか知らないが、せっかく勉強を見てくださいというものを怒らせる必要はない。

「そ、その……どうしてこの公式を使うと解けるのか、その理屈が分からなくて……」

「案外と面倒くさいのね。頭が悪いのなら悪いなりに、素直に丸暗記すればいいのよ」

秀一の言い分をバツサリと斬り捨てた紗夜だったが、口とは裏腹に、理路整然と説明してくれた。まるで出来の悪い弟を見る姉のようだ。そういえば、しばしば真帆にもそんな視線を感じる。秀一には、女性にそう思わせるものがあるのだろうか。

「……………聞いている？」

「え、あ、うん。すごいね、数学の先生より分かりやすかった」

「……その割には冴えない顔だけど」

半ば見惚れながらではあったが、一応納得はいった。しかし現状では付け焼き刃も同然。自信を持つには至らない。

「……先生とエッチすることばかり考えてるから、勉強に身が入らないのよ」

「うーん……やっぱりそうなのかなあ……じゃなくて！ ど、どうしてそのことをっ!!」
紗夜が鼻白む。動揺のあまり、それが誘導尋問だと気づくのに数秒を要した。

「真鍋君、簡単すぎ。でも……ふーん、そっか。でなければ、教室でキスなんかしないでしょうね。ね、せっかくだから聞かせて。あの水無月先生と、どんな行為をしてるのか」
やはり、あの時見ていたのだ。だが真帆のためにも、これ以上の情報を第三者に与えることはできない。それにしても、あのお堅い委員長が、男女のことに興味を示すなんて。

「な……何にもしてない……よ？」

「うそ。あんなにいやらしいキスをしていて、何もならないなんて思えないわ」

グツと上体を寄せてくる。ワンピースのサイズが大きいのか、胸元が緩んで膨らみが見えそうになった。慌てて顔を逸らしたが、太股までがピトツとくつついてくる。

「し、してないっていうか……させてくれないっていうか……」

脚に静電気が流れたようにピリピリ痺れて、視線を外したまま彼女の顔をまともに見られない。女の子の心地いい触感に冷静さを失い、ついぼろつと愚痴を零してしまう。

「そう、なんだ……」

ふふっ……と聞こえた小さな含み笑いに、背筋に寒気が走った。彼女の思惑が読めず、怖い。真帆の弱みでも握るつもりなのだろうか。

「……ね、真鍋君。明日の再試験だけ……」

「う、うん……?」

急に勉強の話に戻ったことを疑問に思いながら、彼女の方に向き直って眼を剥いた。紗夜が、息の掛かりそうな至近距離で見詰めている。薄く微笑み、熱い瞳を潤ませて。四つん這いでにじり寄り、ブラの水玉模様まで確認できる、無防備な胸元が迫ってくる。

「テテテ、テストが、どうかしたのかなっ?」

声が裏返る。彼女も下着を凝視されていることに気づいているはずだ。そして、いつもならそんな秀一を見下すはずなのに、小首を傾げながら信じられないことを囁きかける。

「もし、明日のテストで満点取れたら………いいこと、なーんでもしてあげるわ」

「な、何でも!? いいこと………て!?」

「真鍋君が、水無月先生にしたいこと、されたいこと……何でもよ……」

脂汗が額に浮かぶ。真帆と一番したい行為。それはもちろん、月夜の晩にしたアレに決まっているが、彼女の言葉は、そんなエッチな意味まで含んでいるのだろうか。

「ふふっ……いやらしい顔……。ああ凄い……真鍋君たら、そんなことをしたいの?」

まるで秀一の迷いを読み取ったかのように淫らかな声で囁かれ、期待値と肉棒が急角度で盛り上がる。

「もちろん、満点が条件よ。それ以外は、一点のマイナスでも認めないから」

「ががが、頑張りますっ!」

半信半疑ながらも、俄然やる気が出た。もしかすると、冗談だったのにと嘲笑されるか

もしれない。学園中に言い触らされ、心の傷を負わされるかもしれない。しかしセックス禁止に鬱積していた欲求不満が、どうせなら誘惑に乗ってしまえとそそのかすのだった。

小さな浜辺を、心地よい夜風が吹き抜ける。昨日とは色違いの、ミントグリーンのワンピースにビーチサンダルを履いた紗夜を、彼方の岬の灯台が眩しく照らす。

「ふふっ。それにしても信じられないわ。まさか本当に満点を取るなんて」

一番信じられないのは秀一自身だ。彼女とエッチなことをしたいという欲求が、潜在的な集中力でも発揮させたのだろうか。

「……さあ、どこでしましょうか？」

髪を掻き上げ振り返る彼女に、Tシャツ短パンの秀一はガチガチに緊張した。この期に及んでも、その言葉が本気なのか冗談なのか、判断がつかない。

（で……でも、呼び出したのは、真堂さんだし……）

みんなが寝静まったのを見計らって抜け出してこいと、夕食時にメモを渡されたのだ。もちろん期待はしているが、いざとなると後ろめたさの方が大きくなった。

「すず、するって何を……」

「言っただしょ？ 真鍋君のしたいこと、されたいこと、何でもよ」

そう言いながら肩紐を外す。ワンピースが身体から滑り落ち、彼女の足元で輪を描く。あんぐりと口を開けた秀一の前に現れたのは、シンプルな黒ビキニ。凜とした紗夜に似合

っている、そんな姿を披露してくれるなんて。

「ふふ……。さあどうぞ、ご自由に」

長い脚、流れるようなラインを描いて細くくびれた腰。そして、真帆に比べてずっと小振りながら、お腕を伏せたように綺麗な半球の乳房。見惚れてしまうほど見事なプロポーションだ。震える手を伸ばす。柔らかそうな膨らみから熱気が伝わる。しかし――。

「こ……こんなこと……やっぱり、やめようよ……」

血を吐くような思いで言葉を絞り出した。あと少しで胸に触れられるところだった指先が、名残惜しそうに強張っている。

「……ふうん。……それは、水無月先生のためかしら？」

細い眉が、不快そうに寄せられた。秀一は黙って頷く。確かに紗夜は魅力的で、もし真帆とのことがなければ、一も二もなく、この肢体に飛びついただろう。

「先生を裏切ること……できないから……」

一瞬でも、紗夜とのセックスに心が揺らいだ自分が許せない。彼女に背を向け、宿に帰ろうとした秀一だったが、その左手首に、冷たい感触が掴みかかる。

「な、何……わあっ!!」

金属製の輪。カチャカチャと鳴る鎖。どこから取り出したのか、腕に手錠が嵌められたのだ。その状況を理解する前に砂地へ引き倒され、もう一方の輪が遊泳客への注意が書かれた看板の支柱に掛けられる。瞬時にして自由が奪われ、暴れたり叩いたりしても、外し

方が分からない。そして、あがく秀一を嘲笑う紗夜の手には、別の金属片が光った。

「心配しないで。それはオモチャだし、鍵もここにあるわ」

ほっとしたのも束の間。紗夜は腰を捻じって豪快にそれを投げ捨ててしまったのだ。見事な遠投で飛んだ鍵は、はるか彼方で、ぽちゃんと小さな水音を上げる。

「な——何するんだよっ！」

さすがにこれには気色ばんだ。しかし、秀一を見下ろす眼の冷たさにゾツとして、立ち上がりかけた膝が崩れる。ぺたりと尻もちをついてしまう。

「女の子が触っていいって言うのに……。これは、私に恥を掻かせた罰よ」

下された判決に、首を振って異議を申し立てた。罪に対して刑罰が重い気がする。しかも彼女は長い脚を振り上げ、恐怖におののく秀一の股間を思いきり踏みつけた。

「ぎゃあああああつ!!」

裸足の指が、短パンの上からペニスを捏ね回す。肉棒といわず睾丸といわず容赦なく転がされ、股間に鋭い激痛が走る。

「い、痛い、痛いって、真堂さんっ！」

「あらそう？ その割には、あなたのそれ、大きくなってるわよ」

そんな馬鹿など自分のものを見下ろし、秀一は衝撃を受けた。彼女の言う通り、痛みの原因の半分は、勃起の硬直によるものだったのだ。不思議なことに、そうと分かると、少女の足裏に踏みつけられる屈辱にさえ、心地よい疼きを感じ始める。

「踏まれておちんちん大きくするなんて、いいご身分ね。私なんて、あなたに勉強を教えていたせいで、泳ぐ暇さえなかったというのに」

「い……いや、でもほら、あぐっ……！　ぼ、僕も一応、これで彼女がいる身だし……うぐっ……。浮気的なことはなるべく、さ、避けたいなーっていうか……かはあつ！」

反論中も爪先で勃起をグリグリ扱られ、全身に脂汗が滲み出た。しかもその中に、優しく揉むような動きを巧みに織り交ぜてくる。

「あっ……真堂さん、やめ……あッ！」

交互に襲う、苦痛と快楽。次第に、拮抗していたそれらのバランスが崩れ、快楽が大きくなってくる。このままでは、踏まれるのがクセになってしまいかねない。

「あら、またおちんちんが大きくなったわ。私に踏まれて感じてるんだ？　この変態！」

ゾクゾクする。美少女の足でペニスを揉みくちやにされながら罵られ、訳の分からない快感で頭の中が溶ける。秀一はいつしか腰を迫り出し、紗夜の爪先に勃起を押しつけた。

「あう……うあッ！　い、痛い……いい……いいッ！」

「何をそんなに気持ちよさそうな顔をしているの？　これじゃ罰にならないわね」

足を引つ込められ、秀一はガッカリする自分に戦慄した。もっと踏んで欲しい、罵って欲しいと、勃起ペニスが短パンの中でねだる。しかし、これはまだ序の口だった。夜中とはいえ人目につく危険性のある海岸で、紗夜はさらなる大胆行動に出たのだ。

「自分ばかり気持ちよくなって、ずるいわ……」

「……し、真堂さんっ!？」

声を潜めた紗夜が、放り出された秀一の脚に跨る。そうして彼女は自分のなだらかなお腹を撫でたかと思うと、その左手を、水着のブラへと潜り込ませた。小さな布地が盛り上がり、中で何かをクリクリ摘む。しかも今度は腰を浮かせて、右手首をパンツの中へ。指先が蠢き何かを弄る。彼女は、紗夜は、秀一の眼の前でオナニーを始めたのだ。

「や、やめなよ、こんな場所です！」

「大きな声を出したら、ンッ……誰かに見られてしまう、あ、は……っ」

宿からはかなり離れているとはいえ、ここはまだ砂浜の真ん中だ。すぐそばには車道も走っている。さんざん表で真帆を黽つた秀一が言える立場ではないが、こんなところで女の子が自慰をして、もし誰かに覗き込まれたら取り返しがつかない。

「ん……ほら見て、真鍋君……んふッ、私を、見なさい、あ……ン、ふうあんッ！」

指の動きが速くなる。腰が波打つように前後にうねる。呼吸も乱れてオナニーが本格的になってきた。胸を下から掬い上げるように揉みしだき、ブラがずれた拍子に、秀一の唇が触れそうな近さで乳首がぼろっと飛び出す。

（お……おっぱい、真堂さんの……!?!）

真帆の迫力ある胸に比べれば確かに控え目だが、謙遜するほど小さくない。むしろ、もっと小さい方が紗夜に似合っているときえ思った。硬く尖って震える、豆粒大の桃色蕾。舐めたくなくて、含みたくなくて、しかし真帆の顔が浮かんで慌てて首を引っ込める。

「ダメ……ちゃんと見て、はあつ、ふあああああんっ！」

大きく仰け反った紗夜の上体が、反動で前にばったりと倒れ込んだ。秀一の肩に頭を預け、はあはあと首筋に熱い吐息を吹きかける。それでも彼女の両手は止まらない。露わになった乳房を、水着の中の淫裂を夢中で愛撫し、快感に身体を振らせる。

——くちゅくちゅ、ちゅっく、じゅくつ、ぐじゅっ……。

波の音に紛れて聞こえる、淫らな粘着音。あの紗夜が、冷静な委員長が、自慰で股間を濡らしている。眉を寄せ、頬をピンクに染めて、唇から涎まで垂らして。クラスでは絶対に見せない、だらしなく乱れた顔に、勃起のムズムズが止まらない。

「あはあ……また大きくなった……。どこまで膨れたら、んっ、気が済むの……？」

大きく TENT を張る短パンを見下ろした紗夜は、まるで大好物を前にしたように眼を細めた。唇をペロリと舐める赤い舌が、本当に食べられてしまいそうな妄想を掻き立てる。硬く張った肉棒を触って欲しくて腰を何度も跳ね上げるが、彼女は哀れな懇願を無視し、肩に預けていた上体を元に戻した。

「そういうえば、テスト勉強のお礼、まだ貰っていなかったわ……」

オナニーを中断し、氣だるそうに立ち上がる。好色そうな微笑みが期待を掻き立てる。秀一の頬を撫でた手が彼女のお尻に回った。水着のゴムに手を掛け、焦らすように、ゆっくりと、黒い布切れを剥いていく。腰から太股、膝からふくらはぎと、見せつけるように美脚をなぞったそれは、最後に躊躇なく足首から捨て去られた。



「はっ、あっ……はあああ……」

そうかと思うと、急に脱力して、何とか椅子にしがみつくと有様。そのくせお尻は上下にうねって、アヌスから滑った先の淫裂まで、恥ずかしい場所の全てを裏筋に押しつけてくる。

「欲しいの？ 欲しくないの？」

焦らしながら、挿入の欲求に逸っているのは秀一も同じだった。一刻も早く求めてくれないと、こうして擦っているだけで白濁液が出てしまいそうだ。

（せ、先生……僕、もう限界だよ！）

心の叫びが届いたのか、真帆の手が、そろそろと遠慮がちにお尻に回った。もう、その意思表示だけで十分。尻肉をグッと広げ、ひくつく亀頭を肛門にあてがう。

「ち……違います。今日はそちらではなくて……」

先走る肉棒を押し留め、彼女が開いたのは、もう一つの穴。本来、ペニスを挿入するべき女性の性器。だが、渴望していた場所への挿入を許されたというのに、秀一は逆にたじろいでしまった。

「で、でも先生……！ 卒業まで、そっちでのセックスは禁止だって……」

「いいえ……約束したのは、結婚するまで……です。もう、わたしたちは式を挙げたんですもの……。だから、初夜だから……わたしの純潔を、あなたに捧げたいんです」

「じゅめ、純潔……。じゃあ、やっぱり先生は、あの日のことは……」

なかったことにしようとしている。やり直しを求めている。だが、まだ許してもらえていないと思って落ち込んだら、彼女が急に慌て出した。

「あ、ち、違います！ これはその……わたしのわがままというか……夢なんです！」

「わ、わがまま？ ……夢？」

真帆の顔が真っ赤になる。まるで悪戯を白状するかのように眼を泳がせ、あうあうと唇を強張らせる。

「じ……実はわたし……子供の頃、小説で初夜という言葉覚えて以来……旦那様にバージンを捧げるシーンを想像して……。だだ、だからその……初体験は結婚式の夜につて、ずっと決めていたんです！」

「えっ、じゃあ……！ エッチ禁止つて、神様の教えに従うためとか、そういう理由じゃなくて……」

「ももも、もちろんそれもあります！」

慌てて頷いたが、後のは明らかに付け足し。啞然とした。そのために、秀一ばかりか自分にも我慢を強いていたなんて。だが、子供の頃からのささやかな夢を破ってしまった罪は重い。その責任を取るには、素敵な初夜にしてあげなければならない。恥ずかしい告白に身を竦める真帆の腰を引き寄せ、改めて秘裂にペニスをあてがった。

「それじゃ……その先生の大事なバージン……僕が貰うよ……」

「は……ああああ……う、奪ってください……。あなたに、わたしの純潔を、捧げ……あ

……あ……っ！」

——ずぶ、ずぶずぶ……じゅぶる！」

真帆のむっちりヒップを眺めながら、膣口に勃起を沈めていく。真夜中の学園で無理矢理に奪ってから、長い時間を経て、ようやくここに戻ってきた。いや違う。これが二人の初めての夜。一方的ではない、求め合つての幸せなセックスなのだ。

「せ、先生の……ンッ！ き、きつくて……んむうううっ！ はああッ！ したかつた！ 先生と、こうして！ はう、ふ、はッ！ せ、先生の中……気持ちいい！」

快感と感慨が溢れ出す。頭で処理しきれない快楽が、真帆の膣から秀一の肉棒に流れ込む。しかし、意外な抵抗に阻まれた。何しろ彼女の体験は一度だけ。処女同然の締めつけで凌辱者の侵入を拒む。

「わたし……わたし……はあ、はあ……あ……」

真帆も、自分で思うように受け入れられず、戸惑っていた。せつかく心で繋がったのに身体が結ばれなくては、またすれ違いが生まれはしないかと、危機感が襲ってくる。

「も、もっと力を抜いて、先生……！ ほ、ほら、いつもみたいに……」

彼女の身体も性器も硬くなるばかり。焦って肉棒を突っ込んでいたが、自分の言葉で閃いた。狙うのは、強張るお尻の谷間。秀一は白い丘から指を滑らせると、中心部で咲く菊の花へと指先を潜り込ませた。

「しゅ、秀一さん!? そ、そこは違います、今日は……ひッ！ あ……あああッ！」

アヌスの縁をなぞり、挟るように指を挿れる。すると、零れるほどの愛液が溢れ出し、強張っていた性器が緩んだ。膣口が開くのを見計らい、一気に剛直を食い込ませる。

——じゅぶ、ずぶぶぶ、ずぶう！

「あは。先生、本当にお尻が好きなんだね。ほら、お尻を弄っただけで、こんなに」

「ち、違うの、これは……ああ、入って……入ってる……！」

必死になって否定する真帆だが、アヌスを嬲れば嬲るほど恥肉が蠢き、ペニスを奥に引き込んだ。どろどろで温かい蜜と淫靡な膣壁に包まれて、秀一の腰も蕩けそうに熱い。初めての時には夢中で味わうことができなかった、真帆の膣肉。それをペニスにたっぷりと感じさせようと、あらゆる場所に擦りつける。

「う、動いて……お、お腹の中、大きいのがぐちゃぐちゃって……あ、んあっ……あっ」

胎内を突かれまくり、彼女の声の上擦った。腰も動き始める。窮屈な肉トンネルでペニスを握り締め、甘い涎を塗りつける。

「うっ……ああ……！　せ、先生のおま○こが……僕のに吸いついて……うあはっ！　ヒダヒダが動いて……ちんぽ、いやらしく扱いてるよ……！」

「や……ああああ……！　そんなこと、言っては……らめですううっ……！」

卑猥な実況に恥ずかしがり、くねくねと腰を振る真帆。そのせいで、逆に淫摩擦が激しくなった。濡れた小陰唇が隙間なくぴったりと肉棒に吸いつき、舐める。苛めるつもりが完全に真帆のペース。くねるヒップに捻じられて、ペニスは早くも危機的状況を迎える。

「せ、先生、待つて！　で、出る……出ちゃうから！」

何とか主導権を取り戻そうと、彼女の腰を抱え込んで身体を横に半回転させた。椅子に腰かけた秀一の上に真帆を乗せ、下からガンガンと突き上げる。身体を揺らして喘ぐ彼女の胸を鷲掴みにして、乱暴に揉みしだく。不意に、頭上から視線を感じた。さらに彼女を辱めるアイディアを思いつき、スカートをたくし上げ、大腿開きを強要する。

「ほら先生……神様が、僕たちの繋がっているところをご覧になつてゐるよ？」

「え……え……!!」

呆けた声で正面の壁を見上げた真帆が、驚愕して飛び上がった。天井に描かれたフレスコ画の中央。天使たちに囲まれた神を象徴する強い光が、二人を見下ろしている。

「ああ、駄目！　こんな……こんなところ……許されない！」

「自分から誘つたのに、今頃遅いつて。それに、僕たちは結婚して、こんなことをしてもいい関係になつたんだよ？　神様も、きつと祝福してくれているよ……」

閉じようとした太股を肘で押さえ込み、その手でクリトリスを摘み上げた。膣肉がキュッと唸つて、肉棒を締め上げる。とめどなく溢れる愛液を潤滑油に、彼女の腰が再び動く。秀一も下から突き上げ、彼女の身体を跳ね上げた。

——ぐっちゅ、ぐっちゅ、ぐじゅっぐじゅじゅ！

「あ、あう！　せ、先生……ッ！　ほ、ほら……もつと脚を広げて……。先生の可愛いところ、よく、見せてあげようよ……」

「いや、こんなの……こんなの……あああ……」

乳首を捏ね、陰核を責め、熱い吐息で囁きかける。信仰への罪悪感に苦悩の喘ぎを漏らす真帆だったが、瞳はとろんと蕩け、腰も円を描いて膣肉にペニスを擦りつける。罪の意識よりも、羞恥による快感で悶え、喘いでいた。秀一も限界に近い。もっと激しく彼女を責め立てるため、今度は床に押し倒す。横臥した彼女の右脚を肩に担ぎ上げる。動きやすくなった秀一は、ぶつけるような抽送で、射精に向かって腰を振った。

「や、ああああ！ ふ、深い……っ！ ヒッ!? そ、そんなところ擦られたら……わたし、ンッ……はんっ、はっ……あ……ああああっ！」

真帆も激しく腰を振り立て、肉棒を扱いた。もう出る。本当に限界が来る。だが彼女のあまりの腰振りに、精液が昇り始めた瞬間、結合が外れてしまった。

「ああああん！」

咄嗟に身を起こしそれを掴んだ真帆が、自分の顔をそれに寄せる。数回扱かれたかと思うと、甘い快感に腰が痺れた。

「あっ！ こんな……せんせ……あ、ああッ！」

——びゆる、びゆるびゆる、びちやあつ！

「ふああああ……熱ううい……」

前髪に、紅潮した頬に、そして輝く眼鏡に白濁液が降り注ぐ。桜色の唇や、半開きの口の中にまで流れ込み、愛らしい顔が台無しだ。

「あ……はぁッ！　せ、せんせい……ごめ……う！」

なおも彼女は、射精快感に痺れるペニスを擦り、精液を絞り取る。ピンクの舌が、秀一の吐き出した粘液をうつとりと舐め取る。清純で、純潔を重んじる女教師の卑猥な姿に、出したばかりの肉棒は、即座に硬さを取り戻した。

「先生も……まだイッてないでしょ？」

うっすらと開いた眼が、もつと欲しいと訴える。真帆を仰向けに寝かせ、その手にペニスを握らせた。彼女は白いストッキングの膝を立て、自ら性器に引き寄せ、迎え入れる。だがその途中、彼女の頭の脇に落ちていたブーケから、ピンク色をした何かがはみ出しているのに気がついた。

「ん？　これは……」

「あっ！　駄目え！」

秀一の視線に気づいた真帆が手で隠そうとしたが、その前に拾ってしまった。その形に眼が丸くなる。男性器の形をした、バイブレーターだったのだ。

「そ、それは……もし、秀一さんのが大きくなかった時のためにつて、紗夜ちゃんが……。で、でも、もういらないですよ？　ねっ？」

優等生のはずの委員長が、こんなものまで持っているとは。驚き呆れつつも、悪戯心を刺激される。

「先生、こんなの握りながら誓いのキスとかしてたんだ。エッチだなあ。……でも、せつ

かくの心遣いだから、楽しませてもらおうよ」

「せ、せっかくつて、どうやって……あ、ああッ!」

真帆が仰け反る。ずぶずぶと、ペニスを膣に侵入させると同時に、パイプをアヌスに埋め込んだのだ。

「そ、そんな……両方で……両方でなんて……ええあッ、あッ、あはあああッ!!」

スイッチを入れると、真帆は半狂乱で腰を振った。直腸の振動は、肉壁を通して膣に挿入しているペニスまで震わせた。全身が痺れるような快感に追いついてられ、秀一も狂ったように花嫁を犯す。

「せ、先生凄い! あ、おあッ、お、あああッ! せ、先生は僕のものだからねっ! 僕の……可愛いお嫁さんだよ……先生!」

「ああ……しゅ、秀一さん……! もっと動いて……もつと、あッ、はあああ! し、痺れ……お腹、おま○こ、おま○こがあ!」

呆けた笑みで腕を伸ばす彼女に口づけ、正常位でグチュグチュと濡れた膣肉を掻き回した。直前に出したばかりなのが幸いし、快感に耐えながら真帆を絶頂へと押し上げる。

「あつ……ああッ……ああああん! 気持ちいい! おま○こも、お尻も……ぜ、全部気持ちいいイイイッ!」

恥じらいも慎みも忘れて、真帆は淫語を叫び続けた。うねるように腰を躍らせ、股間で咥え込んだペニスを扱く。信仰の対象の前で、ふしだらな初夜に酔い痴れる。

「ああ……主よ、見てください……！　わたしが、秀一さんのおちんちんを咥え込んでいるところを……わたしたちが愛し合っているところを……！」

「先生……先生……せんせい　いい　いい　ッ！」

互いの身体を掻き抱き、舌を絡め唾液を吸った。性器と粘膜を擦り合い、快感を貪るところしか考えられない。真帆がお尻をくねらせ、パイプを床に押しつけた。急角度で立ち上がった淫具が直腸を刺激し、肉壁越しに肉棒の根元を責める。予想外の快感に、二人は一気に絶頂へと走り出した。

「あああ！　これ凄い、すご……先生、僕、ぼく、うあああああッ！」

「わらひも、ひいあつ！　わらひも、もおおおお　イッちやう、イク、お尻で、あそこ……イッちやうううあああああああああッ！！」

ガクンガクンと真帆の身体が跳ねる。一足先に達した膣肉がペニスを締め上げた。精液を絞り取るような淫肉の収縮に、若肉茎は耐えきれない。

「わあああッ！　せ、せんせい、せんせい！　おあああッ！」

——びゅるるる、びゅる、じゅぶりゅるるりゅうううッ！

「な、なか……熱い、秀一さんの、いっぱい出て……りゅんうあああああん！」

膣内射精の熱さに、達したはずの真帆が、さらに高い絶頂へと昇り詰めた。それが秀一にも激しい快感をもたらし、出しつくしたと思った精液を彼女の胎内に注ぎ込む。

二人は抱き合い、キスをしながら、とどまるところを知らない快感に翻弄され続けた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

